The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け ： 初対面会話相手の年齢に応じて
Author(s)	田, 鴻儒
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 169-181
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け

—初対面会話相手の年齢に応じて—*

田　鴻儒**

キーワード：中国における日本語学習者、スピーチレベルの使い分け、会話相手の年齢

对日语学习者来说，根据会话对方、场面等状况区分使用 speech level 是最难掌握的学习项目之一。容易想象在与日语母语话者接触机会不多的海外，要掌握 speech level 更是难上加难。尽管如此，据我所知到现在为止还没有研究者对海外日语学习者的 speech level 进行过调查研究。本研究的目的是通过对中国国内日语学习者和日语母语话者间十六组会话的分析，解开学习者根据会话对方年龄层区分使用 speech level 的情况。

分析结果表明，相比日语母语话者，日语学习者的 speech level 区分使用模式的个人偏差很大。原因可以归纳成以下三点：(1) 学习者对 speech level 认识不足 (2) speech level 的注意力难以长久持续 (3) 易受会话对方说话方式影响。

八名学习者中有七名没有根据会话对方的年龄层区分使用 speech level。其中有六名没有区分使用 speech level 的意识。并且这六名学习者中的三名完全没考虑 speech level 的“待遇性”。有一名学习者虽然有分开使用 speech level 的意识，但由于注意力无法长久持续，结果面对比自己大三十岁以上的会话对象也同样更多地使用了“普通体”，没能成功地区分使用 speech level。

此外还发现日语母语话者的说话方式也影响了学习者对 speech level 的选择。本稿用实例证明了母语话者的“普通体”的提问、订正性的反馈以及难度高的词汇影响学习者对 speech level 的选择。受这些因素的影响，有些学习者表面看上去能恰当地区分使用 speech level，而有些学习者则显得比起同等会话对象对年长会话对象的 speech level 反而设定得更低一些。

以上分析结果表明，由于受各种因素的影响学习者没能区分使用 speech level。

---

* 中国国内高级日语学习者关于 speech level 的区分使用　—根据初次会话对象的年龄层—（田　鸿儒 (Tian Hongru)）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1　はじめに

会話相手や場面などの状況に応じたスピーチレベルの使い分け[1]は学習者にとって最も習得の難しい項目の1つであると言われている（ネウストプニー 1982、宇佐美 1995)。特に、日本語母語話者（以下、母語話者）と接する機会も日本語に接触する場面も限られている海外においては、スピーチレベルの使い分けの習得は日本語学習者(以下、学習者）にとって一層困難であることは容易に想像できる。しかし、海外における学習者のスピーチレベルについては、管見の限り研究されていない。本研究では、中国における学習者を対象に、学習者の会話相手の年齢に応じたスピーチレベルの使い分けの様相を明らかにする。

2　基本用語および先行研究

2．1　基本用語

スピーチレベルの研究分野では、研究者の間で基本用語および扱う対象が統一されていない。文末のみを扱った調査（伊集院 2004 等）がある一方、文末・語彙・語形式・パラ言語・談話レベル全てを分析対象とした研究（三牧 1989）もある[2]。本論文では、社会的コンテクストから強い制約（三牧 1989）を受ける文末スピーチレベルに注目する。文末スピーチレベルを（1）丁寧体（(＋）と表記）および（2）普通体（(０）と表記）に2分類し、特定の話者の全発話のうち、頻度の高いほうの文末スピーチレベルを基本的スピーチレベルと呼ぶ。((＋)）は丁寧体基調を、((０)）は普通体基調を表す。基本的スピーチレベルからの一時的なスピーチレベルの移行をスピーチレベル・シフトと呼ぶ。

2．2　先行研究

話者がいかに会話相手の年齢に応じてスピーチレベルを操作するのかを調査した研究は、母語話者を対象とした宇佐美（1995）と三牧（2002）および日本在住の学習者を対象とした上仲（1997）等がある。すべて2者間初対面会話を扱っているが、調査対象者の年齢を含む社会的属性が異なっている。順に3つの研究を紹介する。

宇佐美（1995）は女性1名（35歳）と男性1名（39歳）の日本人大学院生を調査対象者に、会話相手は対象者の「目上」「同等」「目下」に当たる同性3名と異性3名に設定した。結論として、初対面の成人2者間の会話においては、丁寧体を基本的スピーチ

---

[1] Canale and Swain（1980）は伝達能力 communicative competence を、文法能力、社会言語能力、方略能力に分類した。状況に応じて個々の変種を使い分ける style-shift com- petence は社会言語能力の下位能力とされている。本稿で論じるスピーチレベルの使い分け能力は style-shift competence の範疇に入る。

[2] 用語については、伊集院（2004）は「スピーチスタイル」、三牧（1989）は「待遇レベル」を用いている。

レベルに設定すること、同等、目下の相手と比べ目上の相手に対して普通体へのシフトを控えることは日本社会の習慣であると述べている。

三牧（2002）は大学生44名（学部1回生から博士前期課程2回生）を会話参加者として、同性2名をペアにし、参加者は同学年ペアと異学年ペアの双方に参加するように組み合わせた。調査の結果、同学年ペアの基本的スピーチレベルは丁寧体基調と普通体基調の両方が現れた。この結果について、普通体基調の話者は基本的スピーチレベルの設定に同学年の仲間意識を表示するのに対し、丁寧体基調の話者は基本的スピーチレベルの設定では疎の人間関係を重視すると解釈した。また、学年上位者と会話する際の基本的スピーチレベルは丁寧体を基調とすることが、大学生にとっても社会的規範となっているという。同学年の相手との会話から上学年の相手との会話への基本的スピーチレベルの変化のパターンについては、(1) 普通体から丁寧体へと変化、(2) 丁寧体保持パターンの2パターンが認められた。基本的スピーチレベル自体は変化しなかった丁寧体保持パターンでも、スピーチレベルの比率を見ると、上学年の相手に対しては、普通体の比率が減少しその分丁寧体が増加し、丁寧体方向への傾向がより強まる傾向を示した。この傾向から、「終了文の文末は、明確に待遇を表示する箇所である。社会的上下関係を認識していることをその位置で明確に表示することは、社会的な「わきまえ」に沿ったポライトネス表示」(p.68) と指摘した。表1に、母語話者の大学生の初対面会話における会話相手の学年に応じた基本的スピーチレベル使い分けパターンを示した。

表1　大学生の「対同学年→対上学年」基本的スベルの使い分けパターン

<table>
<tr><th colspan="3">基本的スピーチレベル</th><th rowspan="2">スピーチレベルの比率の変化</th></tr>
<tr><th>対同学年の相手</th><th colspan="2">対上学年の相手</th></tr>
<tr><td>普通体</td><td rowspan="4">⇒丁寧体</td><td rowspan="4">理由：社会的上下関係を重視し、それをスピーチレベルの位置で明確に表示</td><td rowspan="2">（＋）大幅増
（0）大幅減</td></tr>
<tr><td>理由：仲間意識を重視</td></tr>
<tr><td>丁寧体</td><td rowspan="2">（0）減
（＋）増</td></tr>
<tr><td>理由：疎の人間関係を重視</td></tr>
</table>

（三牧2002の表をもとに、筆者が一部改訂）

上仲（1997）は英語を母語とする日本在住の中上級学習者4人（男女2名ずつ）と、学習者とは初対面で、それぞれ「目上」「同等」「目下」に当たる3人の母語話者との同性2者間会話を調査した。分析の結果、学習者たちは教えられるまでもなく、会話相手の目上、同等、目下というような日本的な社会的要因によって選択するスピーチレベルを明確に使い分けているという。

先行研究をまとめると、母語話者であろうと日本在住の学習者であろうと、初対面会話においては、相手の年齢的な上下を認識しそれをスピーチレベルに反映させている。つまり、年齢の上下に応じてスピーチレベルを明確に使い分けている。

3　研究方法

3. 1　調査対象者および会話データ収集

スピーチレベルを操作するためには、一定の会話能力を持つことが前提条件であると判断し、大学で日本語を専攻している上級学習者を対象とした。具体的には、中国西南部におけるある総合大学の日本語学科3年生8名（男女4名ずつ、年齢20～22歳、平均21.2歳）を対象にした[3]。学習者の会話相手は、学習者とは初対面であり、それぞれ「同等」「目上」にあたる2人の母語話者を割り当てた。「同等」にあたる母語話者の年齢は20～25歳（平均年齢23歳）で、「目上」に当たる母語話者の年齢は50～66歳（平均年齢58.7歳）であった。性差がスピーチレベルの選択に影響を与える可能性を排除するために、今回はすべて同性同士の会話に統一した。会話データ収集前には年齢、性別など会話相手についての情報は一切与えなかった。話題は自由で世間話で構わないと伝え、1ペア15分ずつの会話を収録した。こうした方法で、対同等相手の会話（以下、対「同」）8ペアおよび対目上相手の会話（以下、対「上」）8ペア合計16ペアの会話データを収集した。会話終了直後には、15分程度のインタビューを実施し、相手・会話についての感想および言語操作意識について語ってもらった。

3. 2　分析方法

上記の方法で得られた16ペアの初対面会話データを全て「基本的な文字化の原則BTSJ（改訂版）」（宇佐美2003）にしたがって文字化した。文末に注目し、丁寧体の文には（+）、普通体の文には（0）をつけた。こうした方法で、Excelで分析資料の会話データベースを作成した。なお、中途終了型発話[4]およびあいづちは別の視点から分析する必要があると判断し、本稿では分析に含めないことにした。

4　スピーチレベルの分布

4. 1　「そう」系あいづち

会話データを観察すると、ほぼ全員の学習者が「そうですか」「そうですね」など丁

---

[3] 全ての学習者がすでに日本語能力試験1級に合格したか、合格まで数点の差であった。なお、全員が留学経験を持っていなかった。

[4] 中途終了型発話とは、「述部が省略される場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話」を指す（宇佐美1995:35）。

寧体の「そう」系あいづちのみを使用していたことに気づいた。「そう系」あいづちを含めて算出したスピーチレベルの比率は、含めない場合と比べて（＋）が平均9%も上がっていた。

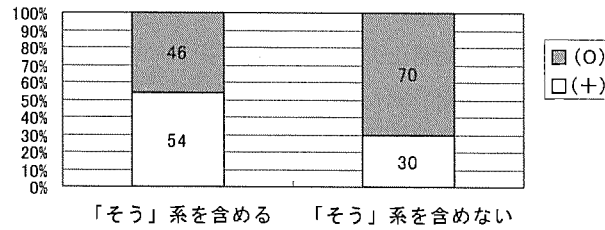

図１　学習者 CF3 の対「同」におけるスピーチレベル分布

一方母語話者の場合、比率の変化率は1、2%にとどまっていた。特に、学習者 CF3 の場合は、図１に示す通り、基本的スピーチレベルが変わるほど差が大きかった。

以上から、「そう」系あいづちが学習者のスピーチレベルの分布を大きく左右していることが分かった。学習者のスピーチレベルの全体的な使用傾向を把握するために、本稿では「そう」系あいづちを除いてスピーチレベルの比率を算出することにする。「そう」系あいづちについては、稿を改めて論じたい。

4. 2　会話参加者全員のスピーチレベルの分布

「そう」系あいづちを除いて算出した会話者参加者全員のスピーチレベルの分布は表２の通りである。

表２　会話参加者のスピーチレベルの分布

	学習者	発話数 丁寧体	発話数 普通体	基本的スピーチレベル	占有率	会話相手	発話数 丁寧体	発話数 普通体	基本的スピーチレベル	占有率
「同」場面	CF1	54	29	((+))	65%	JFS2	9	77	((O))	90%
	CF2	27	46	((O))	63%	JFS1	2	86	((O))	98%
	CF3	22	51	((O))	70%	JFS3	1	158	((O))	99%
	CF4	63	29	((+))	69%	JFS3	5	131	((O))	96%
	CM1	64	25	((+))	72%	JMS1	50	15	((+))	77%
	CM2	48	31	((+))	61%	JMS3	15	101	((O))	87%
	CM3	43	61	((O))	59%	JMS1	52	32	((+))	62%
	CM4	31	9	((+))	78%	JMS2	70	30	((+))	70%
「上」場面	CF1	41	35	((+))	54%	JFO2	9	81	((O))	90%
	CF2	22	11	((+))	67%	JFO3	40	44	((O))	52%
	CF3	36	42	((O))	54%	JFO1	36	72	((O))	67%
	CF4	37	29	((+))	56%	JFO2	11	94	((O))	89%
	CM1	36	21	((+))	63%	JMO2	63	34	((+))	65%
	CM2	43	13	((+))	77%	JMO3	45	16	((+))	74%
	CM3	33	43	((O))	57%	JMO4	48	40	((+))	55%
	CM4	32	8	((+))	80%	JMO1	47	11	((+))	81%

会話者の属性を表す表記において、左から１番目のアルファベットは国を表わし（C＝中国人学習者、J＝母語話者）、２番目は性別を表し（F＝女性、M＝男性）、３番目は学習者に対する日本語母語話者の相対的な年齢を表す（S＝同等、O＝年上）。

5　会話相手の年齢に応じたスピーチレベルの使い分け

5．1　対同等→対目上の基本的スピーチレベルの使い分けパターン

学習者の対「同」から対「上」への基本的スピーチレベルの使い分けパターンには、以下の3パターンが認められた。(1) 普通体から丁寧体へと変化、(2) 普通体保持パターン、(3) 丁寧体保持パターンの3パターンである。さらにスピーチレベルの比率の変化を考慮すると、表3の通り、6パターンが観察された。

表3　学習者の「対同等→対目上」基本的スピーチレベル使い分けパターン

基本的スピーチレベル		スピーチレベルの比率の変化パターン	学習者	基本的スピーチレベル 対同等 → 対年上	ケース
対同等	対目上				
普通体	→丁寧体	(＋) 大幅増、(0) 大幅減	CF2	((0))63% → ((＋))67%	1
	→普通体	(0) 減、(＋) 増	CF3	((0))70% → ((0))54%	3
		ほぼ変化なし	CM3	((0))59% → ((0))57%	4
丁寧体	→丁寧体	(0) 減　(＋) 増	CM2	((＋))61% → ((＋))77%	2
		ほぼ変化なし	CM4	((＋))78% → ((＋))80%	5
		(＋) 減、(0) 増	CF1	((＋))65% → ((＋))54%	6
			CF4	((＋))69% → ((＋))56%	7
			CM1	((＋))72% → ((＋))63%	

先行研究のうち、本稿で扱った学習者の社会的属性に一番近い日本語母語話者の大学生を対象とした三牧（2002）の分析結果（2.2の表1）と比較してみると、母語話者の大学生は2通りの変化パターン（普通体→丁寧体、丁寧体→丁寧体（普通体減））を示したのに対し、本稿の学習者の結果はばらつきが大きく、一定の傾向が見られなかった。母語話者と同様の使い分けパターンを示した学習者は2名であった（表3網掛けのない部分）。他の6名の学習者は両場面において非常に類似したスピーチレベルを選択し、年齢の大きく異なる相手に対するスピーチレベルの使い分けが見られないケース、および目上の相手に対して丁寧体の比率が同等の相手より下がるという母語話者とは逆の傾向を示したケースであった（表3網掛けのある部分）。以下の5.2では母語話者と同様の使い分けパターンを示したケースについて、5.3では母語話者と異なるパターンについて分析する。なお、各学習者は以下で述べる要因のいくつかを複合的に示すことが多かったが、以下の分析では、特定の要因を特に顕著に示したケースを取り上げて、その要因を中心に論じる。

5．2　母語話者と同様の使い分けパターンを示したケース

5．2．1　ケース1：相手の年齢に応じたスピーチレベルの使い分け

学習者CF2は対「同」においては普通体（63%）を、対「上」では丁寧体（67%）を基調に示した。使用意識について質問すると、対「同」では「年齢が同じだから心理的

な負担がない。リラックスして敬語の使用を気にしなかったから、普通体を使っていた」と語ったのに対し、対「上」では相手が年長者という社会的上下関係を念頭に置き礼儀と尊敬の表れとして丁寧体を優位に用いていたと回答した。このように、CF2が会話相手の年齢に応じてスピーチレベルを使い分けた様子が窺える。

5. 2. 2　ケース2：母語話者による質問文のスピーチレベルの影響

CM2は両場面において丁寧体を基本的スピーチレベルに設定し、対「同」の61%と比べ対「上」は77%と（+）が増加し、(+) 方向への傾向がさらに強まる傾向を示した。使用意識を質問したところ、「丁寧体に自信があるから、丁寧体をよく使っている」と語った。すなわち、CM2は丁寧体に慣れているだけで待遇意識と関係なくスピーチレベルを使っていた。そこで、なぜCM2は相手の年齢に応じてスピーチレベルをうまく使い分けているように見えたのだろうか。両場面の会話を比較してみると、対「同」の相手JMS3は87%の普通体を示しており、会話例1のように、CM2への質問でも普通体を用いていた。CM2は丁寧体基調で話していたにもかかわらず、普通体の質問に釣られて、直後の回答では思わず普通体にシフトしていた。一方、対「上」の相手は74%の丁寧体を示しており、会話例2のように、CM2への質問でも丁寧体を用いており、CM2もつられて丁寧体で回答していたことが分かる。

〈会話例1：同等の相手との会話、CM2の日本語学習について〉

CM2：21歳の男性学習者　JMS3：23歳の男性母語話者

1	JMS3：	聴力が弱いって言ってたけど、いつも勉強してるの↑	(0)
→2	CM2：	勉強してる。	(0)
3	CM2：	でも、日本人と一緒に会話をする機会が少ないです。	(+)
4	JMS3：	いまは「相互学習」してる↑	(0)
→5	CM2：	少ししてる。	(0)
6	CM2：	相手はサッカーをしてた時に知り合った日本人です。	(+)

〈会話例2：目上の相手との会話、CM2の日本語学習について〉

CM2：21歳の男性学習者　JMO3：65歳の男性母語話者

1	CM2：	中国人の学生は日本人の留学生と「相互学習」をしています。	
2	JMO3：	CM2さんは「相互学習」した経験はありますか↑	(+)
→3	CM2：	はい、あります。	(+)

表4の普通体に注目すると、会話相手の普通体の質問文に影響され結果的に普通体となっている回答（以下（0）回答）は、対「同」では普通体発話の半分を占めている一

方、対「上」では、そのような発話は一切観察されなかった。対「同」における（0）回答を差し引いてみたところ、基本的スピーチレベルの丁寧体の割合は75%となり、（0）回答が見られなかった対「上」の77%に極めて近くなった。

表4　CM2のスピーチレベル分布

会話相手	丁寧体	普通体	
		（0）回答	その他
対「同」	48	15	16
対「上」	43	0	13

一見CM2は相手の年齢に応じてスピーチレベルを使い分けているように見えたが、会話を詳細に分析すると、たまたま同等の相手が普通体の質問を多くし、目上の相手が丁寧体で質問を多くしたため、相手の質問文のスピーチレベルに影響された結果であることが分かった。学習者がスピーチレベルを主体的に使い分けていないことが明らかになった。会話相手の質問文のスピーチレベルに影響され、質問文と同じスピーチレベルで回答する現象は他の7名の学習者にも見られたが、特にCM2の傾向が顕著であった。

ここで強調したいのは普通体の質問に影響され思わず普通体で回答することは大きな危険性を有していることである。日本の社会文化的慣習として、上位者は丁寧体、普通体のどちらを用いることも可能であるが、下位者は基本的スピーチレベルとして丁寧体を選択しなければならない。そのため、上位者の普通体の質問に対して普通体で回答することは失礼な行為と捉えられる危険性がある。

5. 3　母語話者と異なる使い分けパターンを示したケース

5. 3. 1　ケース3：スピーチレベルに対する注意の持続困難

両場面において普通体を基本的スピーチレベルに設定した学習者CF3は上記のCF2（ケース1）と同様の待遇意識を持っていた。対「同」では「相手の年齢が近くて、気さくに普通体で話していたから、自分も相手に合わせて普通体を使っていた」、対「上」では相手が自分よりずっと年上と認識し丁寧体を使用すべきであると語った。しかし、スピーチレベルの分布を見ると、対「上」の（+）は46%であり、対「同」の（+）30%と比べ（+）の比率が上がったものの、基本的スピーチレベルはこの場合でも普通体であった。CF3はインタビューで、対「上」の相手に対して「最初は意識して丁寧体を選択していたが、その後内容に集中して丁寧体の使用を忘れてしまった」と語った。つまり、CF3は会話相手の年齢に応じてスピーチレベルを使い分ける意識があったものの、注意が持続せず意識通りに使い分けることはできなかった。

5. 3. 2　ケース4：スピーチレベルの待遇的な意味の無理解

CM3の会話相手のスピーチレベルを見ると、対「同」の相手JMS1は62%、対「上」

の相手JMO4は55％の割合で丁寧体を基調に示した。それにもかかわらず、CM3は対「同」、対「上」場面のどちらにおいても普通体を基本的スピーチレベルに設定し、各スピーチレベルの比率まで非常に類似した分布を示した（表3参照）。それについて、CM3はインタビューで「スピーチレベルのことは特に気にならず、意味の伝達を第一義にしている」と語った。すなわち、CM3はスピーチレベルの待遇的な意味を考慮せずに会話をしていた。

次の会話例3はCM3とJMO4の会話の一部である。

〈会話例3：目上の相手との会話、CM3の進路と日本語スピーチコンテストについて〉

CM3：21歳の男性学習者、JMO4：66歳の男性

1	JMO4：	日本語の先生になるんですか↑	（＋）
→2	CM3：	日本語の先生。	（0）
		省略	
3	JMO4：	この前スピーチコンテストに出たんですか↑	（＋）
→4	CM3：	いいえ、出なかった。	（0）
5	JMO4：	出なかったんですか。	（＋）

JMO4が丁寧体を用いて丁寧な話し方をしているにも関わらず、CM3は30歳以上も年長の相手に対しても普通体を優位に使っていた。CM3の言動は初対面の年長者に対しては丁寧体を選択するという日本社会の規範から逸脱しており、失礼だと思われかねない。

5．3．3　ケース5：相手の年齢に関わらず類似した丁寧体基調

学習者CM4は2つの会話において、共通して丁寧体基調を示した。対「同」について、CM4はインタビューで「初対面だから丁寧体を使った」と、初対面という疎の社会的関係を意識し丁寧体を基調に選択した理由を語った。対「上」については、「相手が年上で、しかも初対面だから、丁寧体を使った」と、相手が年上という社会的上下関係と初対面という疎の場面を考慮し、丁寧体を基調に選択した様子が窺える。しかし、スピーチレベルの比率を比較すると、対「同」と対「上」ではそれぞれ78%と80%でほぼ差はない。一方、母語話者の場合は2．2で述べたように、対「上」は対「同」に比べ普通体の比率が減少しその分丁寧体が増加し、丁寧体方向への傾向がより強まる傾向を示している（三牧2002）。以上、CM4は相手の年齢に応じてスピーチレベルの比率を明確に操作していないことが分かる。

5. 3. 4　ケース6：訂正的フィードバックがスピーチレベルに与える影響

CF1の使い分けパターンを見ると、対「同」は丁寧体が65%であったのに対し、対「上」では54%と下がった。この不可解な変化パターンを生んだ理由は何であろうか。CF1はインタビューで「授業で最初に丁寧体を習って、その後普通体を習ったので、会話では思いつく感じで両者を混ぜて話している」と語った。すなわち、CF1も上記のCM2（ケース2）とCM3（ケース4）と同じく年齢にかかわる上下の待遇意識と無関係にスピーチレベルを使っていた。CF1が参加した2つの会話を比較分析してみると、対「同」の相手JFS2と対「上」の相手JFO2は同じく90%という高い比率で普通体を示したが、JFO2がCF1の日本語の間違いを一々訂正していた点が異なっていた。CF1はJFO2の訂正により、自分の日本語が間違ったことに気付き、相手が行った普通体の訂正をそのまま繰り返し承認・内化していた（会話例4）。

〈会話例4：目上の相手との会話、大学受験について〉

CF1：20歳の女性学習者、JFO2：56歳の女性母語話者

1	CF1：	でも、試験はラッキーもありますよ。	（＋）
2	JFO2：	/1秒/うん、運もあるよ。	（0）
→3	CF1：	おー、運もあるよ。	（0）

もちろん、対「同」においてもCF1の日本語の問題は生じていた。しかし、それにもかかわらず、相手のJFS2はJF1の間違いに対して訂正的フィードバックを与えず、問題を顕在化させなかった。それは相手の問題を指摘することは明らかにFTA[5]（face threatening act）の1つだからであろう。JFS2の行為はFTAという観点から見れば、問題を顕在化することによるフェイスの侵害を防ぐためのネガティブ・フェイス>への配慮であると捉えられよう。

以上の分析から、学習者CF1が目上の相手に対してスピーチレベルを逆に下げた一因は、目上の相手によって頻繁に与えられた普通体の訂正的フィードバックを繰り返していた結果であることが分かる。他の要因としては次に述べる「単純エコー型」（ケース7）等も見られた。これらの要因により、対「上」において普通体の発話数が増え、結果として丁寧体の比率が下がったことが分かる。

---

[5] Brown and Levinson（1987）は、人間はみなfaceを持っていると主張した。faceには（1）positive face（ポジティブ・フェイス）：自分が他人に評価されたい、認められたいという欲求（2）negative face（ネガティブ・フェイス）：自分の行動や領域を侵害されたくないという欲求の2種類があるという。また、相手のfaceを脅かすおそれのある発話行為をFTA（face threatening act）と呼んでいる。

5. 3. 5　ケース7：「単純エコー型」聞き返しがスピーチレベルに与える影響

CF4とCM1は両場面において丁寧体をより多く選択したが、対「同」と比べ、対「上」の丁寧体の使用率がそれぞれ13%、9%下がった。なぜCF4、CM1は同等の相手よりも目上の相手に対してスピーチレベルを低めに設定したのであろうか。2名の会話を分析すると、共通要因は対「上」の相手が難しい単語や学習者に馴染みのない表現を使用していたため、CF4、CM1が「単純エコー型」の聞き返しを多く用いていたことが分かる。次の例5がその1例である。

〈会話例5：目上の相手との会話、JFO2が息子の家を訪ねない理由について〉

CF4：21歳の女性母語話者　JFO2:56歳の女性母語話者

1 JFO2：　なぜそうなるかというと、争いたくない。
→2　CF4：　あらそ↑　（0）
3 JFO2：　あらそう。喧嘩、喧嘩をしたくない。

尾崎（2001）は聞き返しの表現形式に着目し、2つの基準を立てて聞き返しの分類を行った。分類の第1基準は、聞き返しが先行する相手の発話の全体または一部を繰り返しているかどうかである。繰り返している聞き返しを「エコー型」、繰り返していない聞き返しを「非エコー型」と名づける。エコー型には、先行要素を単に繰り返すだけのもの（単純エコー型）と繰り返した後に「分からない」「知らない」などの表現を付け足すもの（複合エコー型）とがあるという。第2基準は聞き返しが形式上確認要求と見なすことができるかどうかである。確認要求と見なすことができる聞き返しを「確認型」、反復、言い替え、説明などの発話調整を求める聞き返しを「非確認」と名づけている。その上、単純エコー型はすべて確認型であると述べ、聞き返しを（1）単純エコー型（エコー・確認型）、（2）複合エコー型（エコー・非確認型）、（3）確認型（非エコー・確認）、（4）非確認型（非エコー・非確認）の4種類に分類している。

確かに母語話者の場合は、「あらそ↑」のような単純エコー型を用いて相手に説明を要求することはまれである。しかし、前に示した会話例5のように、学習者にとって相手の話の中で分からない単語が出た場合、単語をそのまま繰り返し、言い替えや説明を求めることは珍しくない。

丁寧さの観点からみると、学習者が分からない単語を繰り返し、上昇音調で明瞭に発音することは丁寧さに欠けている。「…はどういう意味ですか」「…とは何ですか」のような表現を使うほうが相手に丁寧な印象を与えるだろう。また、会話の流れを遮らないために、分からない単語をそのまま繰り返して聞き返す場合は、上昇音調で直接相手に

聞くのではなく、独り言で自問するかのように話すと問題ないだろう。自問は直接聞き手に向けるものではないにもかかわらず、「その単語の意味が分からない」という合図を相手に送ることができる。そのため、結果として間接的に言い替えや説明を要求できる。

以上の分析から、学習者 CF4、CM1 は意図的に目上の相手に対して低めにスピーチレベルを設定したのではなく、目上の相手が難しい単語・表現を多く用いていたため、学習者がそれらをそのまま繰り返す「単純エコー型」で説明要求を行っていた結果であることが分かる。

6　まとめ

本稿では、これまで研究されてこなかった中国での上級学習者を対象に、学習者と母語話者の計 16 ペアの初対面会話データに基づき、学習者の会話相手の年齢に応じたスピーチレベルの使い分けを実証的に分析した。その結果、学習者のスピーチレベルの使い分けパターンは母語話者に比べ個人によるばらつきが大きかった。その要因は（1）学習者のスピーチレベルに対する知識の欠如、（2）注意の持続困難および（3）会話相手の話し方に影響されやすいことの 3 点にまとめることができる。

8 名の学習者のうち 7 名までもが会話相手の年齢に応じてスピーチレベルを使い分けられなかったが、そのうち 6 名はスピーチレベルを使い分ける意識がなく、さらにそのなかの 3 名はスピーチレベルの待遇的な意味さえ考えていなかった。スピーチレベルを使い分けられなかったものの使い分ける意識があった 1 名は、注意が持続せず、結果的に 30 歳年上の相手に対しても普通体基調を示した。

また、母語話者の話し方も学習者のスピーチレベル選択に影響することが認められた。本稿では、母語話者の普通体の質問文、訂正的フィードバックおよび難しい単語・表現が、学習者のスピーチレベル分布に影響を与えたことを実証的に示すことができた。これらの影響により、学習者がうまくスピーチレベルを使い分けたように見えたり、逆に同等の相手より年上の相手に対してスピーチレベルが下がった分布を示したりした。普通体の質問文に影響されて思わず普通体で回答したり、難しい単語を普通体で聞き返したりすることは、丁寧さの考慮に欠け失礼な行為にあたるおそれがある。

以上、様々な要因によって学習者がスピーチレベルを使い分けられない実態が明らかになった。一方、学習者に対するインタビューからは、学校ではスピーチレベルの待遇的な意味や使い分けルールが教授されていないことが分かった。日本国内の学習者は母語話者と接する機会が多いためスピーチレベルの独学も期待できる（上仲 1997）と思われる。しかし、日本語への接触場面が限られている海外では、教育現場においてスピー

チレベルの使い分けを含めたコミュニケーション教育のあり方が検討されるべきであると考えられる。

参考文献

伊集院郁子「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6巻2号、社会言語科学会、2004、pp. 12-26

上仲淳「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念—』、凡人社、1997、 pp. 149-165

宇佐美まゆみ「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号、昭和女子大学近代文化研究所、1995、pp. 27-42

宇佐美まゆみ「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）の開発について」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C(2)（課題番号：13680351）研究成果報告書、2003、pp. 4-12

尾崎明人「接触場面における在日ブラジル人の『聞き返し』とその回避方略」『社会言語科学』4巻1号、社会言語科学会、2001、pp. 81-90

ネウストプニー J.V.『外国人とのコミュニケーション』岩波新書、1982

三牧陽子「待遇レベル・シフトの談話分析」『AKP紀要』3号、AKP同志社留学生センター、1989、pp. 34-50

三牧陽子「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における『社会的規範』と『個人のストラテジー』を中心に—」『社会言語科学』5巻1号、社会言語科学会、2002、pp. 56-74

Brown, P. and Levinson, S. *Politeness –Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. 1987

Canale, M. and Swain, M. Theoretical Bases of Communicative Approaches of Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics1*. 1980. pp. 1-47